

2022 年度

保護者アンケート報告

2022年度3月報告

一般財団法人 理数教育研究所(R i m s e)

東京懇談会・保護者アンケート分科会

令和の学校教育の取組についての家庭での受け止め方

高山 裕一

元栃木県小学校長会長 元日本教育工学協会理事 元栃木県小学校教育研究会理科部会長
現作新学院人間文化学部特任教授 獨協医科大学看護学部非常勤講師

調査の趣旨

GIGAスクール構想として、児童生徒1人1台のパソコン配付が一気に進み、それに伴い個別最適な学びとして、学び方の多様性への対応も可能となった。また、コロナ禍の中、学校行事の見直しやSDGsへの対応など、今までの学習以外のことにも地域や家庭の関心も高まってきている。

そこで、保護者がこれらの新しい教育内容についてどの程度関心があるのか、また今何を望んでいるかを調査することで、「社会に開かれた教育課程」に合った教育改革のための課題を見出せるものと考え、保護者への実態調査を行うことにした。

調査内容

新しい教育の内容やコロナ対応、ICT教育などについて、自分の子供の実態をもとに「学校側の取組をどう見ているか」「家庭での対応をどのように考えているか」と両面からの調査を行った。その際、できるだけ保護者の理解できる用語を用い、さらに保護者が関心の持てそうな内容に絞って質問することにした。

① 1人1台の端末導入について

- ・端末の家庭での利用
- ・学校と家庭を結ぶICT機器の利用

② コロナ禍で家庭が影響を受けたことについて

- ・学校行事
- ・授業参観

③ 外国語教育について

- ・外国語教育の効果
- ・英語の学習への家庭の対応

④ SDGsへの対応について

- ・学校の取組の周知度
- ・家庭での取組

⑤ 理数教育

- ・算数、理科についての好き嫌い
- ・理数教育についての興味関心

総括

学校から示された端末の使い方、学校行事や授業参観の方法の変更、外国語教育やSDGsの取組など、結果全体を通して学校の様々な方策について家庭では冷静に対応していることが分かった。

つまり、「新しい教育」と考えているのは学校教育現場だけであり、既に1人1台のスマホを持ち、マスク着用、手の消毒など1年生から自分自身で身を守ることが求められる今の社会において、各家庭の価値観で社会の問題に対応することが家庭での常識となっているのではないだろうか。

それが、家庭での英語学習で「特に何もしていない」という回答が6割を超え、SDGsへの対応について「学校での取組は知らないが、家庭ではいろいろ行っている」という回答に顕著に表れている。

そこで気になるのは、学校側の対応である。

端末の活用について未だに紙と併用して二重に便りを配布していたり、端末を家庭に持ち帰っていないという学校があったり、ネットワークでの遠隔配信ができるのに「時間を調節して学校行事や授業参観を対面で行う」という方法をとっていたりする。

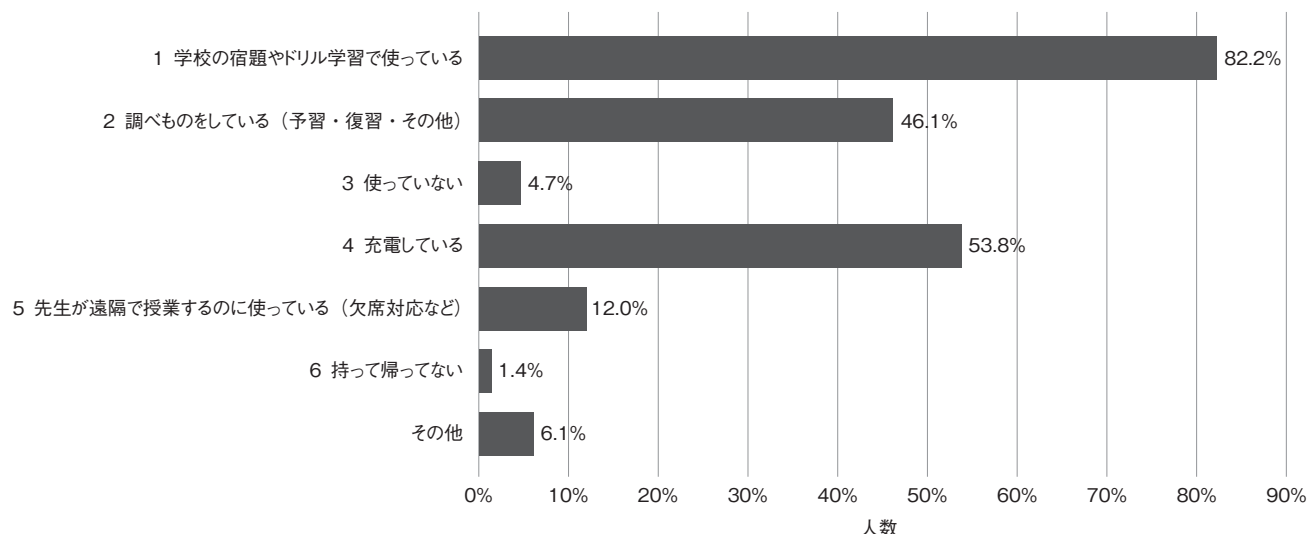
また理数教育や外国語教育など国が力を入れていることについてあまり関心を示さない家庭が多いことから、まだまだ「社会に開かれた教育課程」にはほど遠いのではないかと感じる結果となった。

終わりに

この調査は、アンケートのアプリケーションを使用して保護者のスマホで回答する方法をとった。そのためスムーズに回答と集計を行うことができたが、これは数年前には全く想像も出来なかったことである。社会の情報化が急激に進み、「個別最適な学び」が当たり前になってきた今の社会において、個別な家庭の考え方に対応できる学校教育のあり方がさらに問われるだろう。

1. GIGAスクールについて (全学年 1,286人)

① 各学校でPC（1人1台のタブレット）が導入されましたが、ご家庭での使いかたを教えてください。



どの学年も70%以上が、「学校の宿題やドリル学習で使っている」と回答している。

また、「調べものをしている（予習・復習・その他）」が中・高学年では50%以上の児童以上となっている。「充電している」という学習では使っていないお子様が全学年で50%以上となっている。また、欠席等での学校との遠隔授業を行っているのは、10%余りとなっている。家庭では使っていない、持って帰っていないという回答はほとんどなかった。

その他としては、低学年では「ゲーム」中学年では「絵を描く、プログラミング」高学年では「タイピング」という意見があった。特に高学年ではタイピングという回答が多く見られた。

タブレットを使う宿題としてドリル学習が多いのは、今まで使用していたドリル学習用の冊子から、アプリケーションのドリル学習に切り替えている学校が増えているので、今までの宿題と同様に使用しているものと考えられる。（この地域ではドリルを導入している）

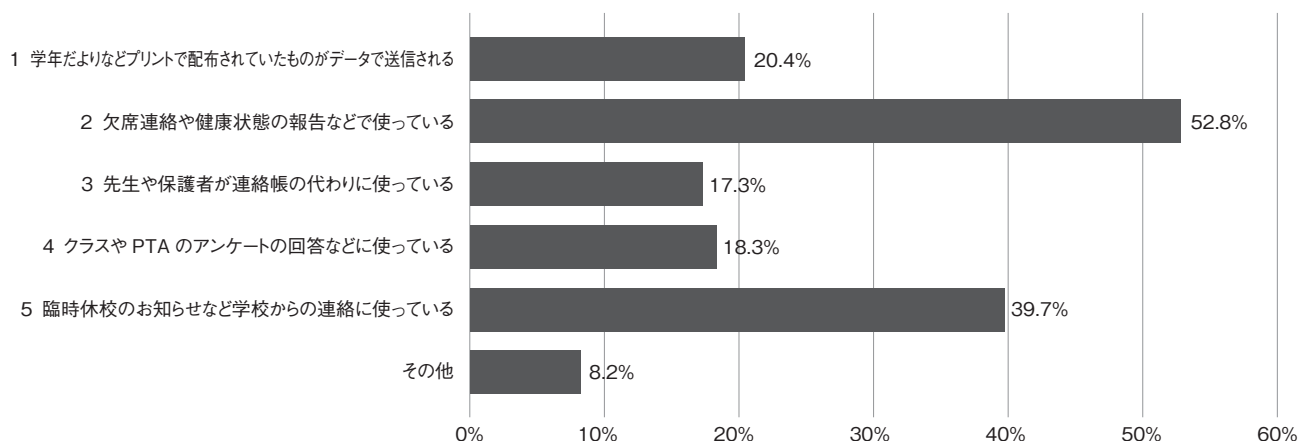
「調べものをしている」という活動が中高に偏るのは、断定はできないが、必要な情報を見つけ抽出するという学習活動は低学年には難しいとの可能性がある。

また、「充電している」という回答が半分以上あるのは、「タブレットは持ち帰る」という指導が文科省や教育委員会からあり、また家庭で必要のない教科書類は学校に置いて、タブレットを持ち帰るという学校もあることが推測できる。

今回の調査で、10%前後の学校の欠席時に遠隔で授業を行うために使用しているというのは、コロナやインフルエンザである程度元気でも学校に行けない状態の時には有効な手段の一つとして考えられる。当然そのように使用できるのはタブレットを新しい教育機器として活用できる教職員が1割程度いるということになる。

また、その他の少数意見であるが、回答にあった「タイピングの練習」や、思考・表現を伴う自主的な学習、自分のキャリアを見つけられるような興味関心に基づく学習などを希望する意見もあった。

② 学校と保護者の間での PC や連絡ノートなど ICT 機器の使い方について教えてください。



学校と保護者での ICT 機器の使い方については、児童のタブレット以外に保護者のスマートフォンなどの機器も結果に含まれていることに留意したい。

もっとも多いのは、欠席や健康状態の報告について 50% 以上の保護者が利用している。

40% 前後の学校が、臨時休校など予定外の内容の伝達に ICT 機器を利用していることがわかる。またプリントの配布、連絡帳代わり、アンケートの回答などについては 20% 弱で利用している。その他については、「使っていない」という回答が多く、これは児童用のタブレットをこのような内容に利用していない。

これらの結果から、まずは緊急を要する欠席や休校の連絡に使われているように、予定していない相互の連絡に今までの電話連絡に置き換わっていることが推測される。

文字として記録されることで保存できまた正確に伝わるので有効性が高いと思われる。

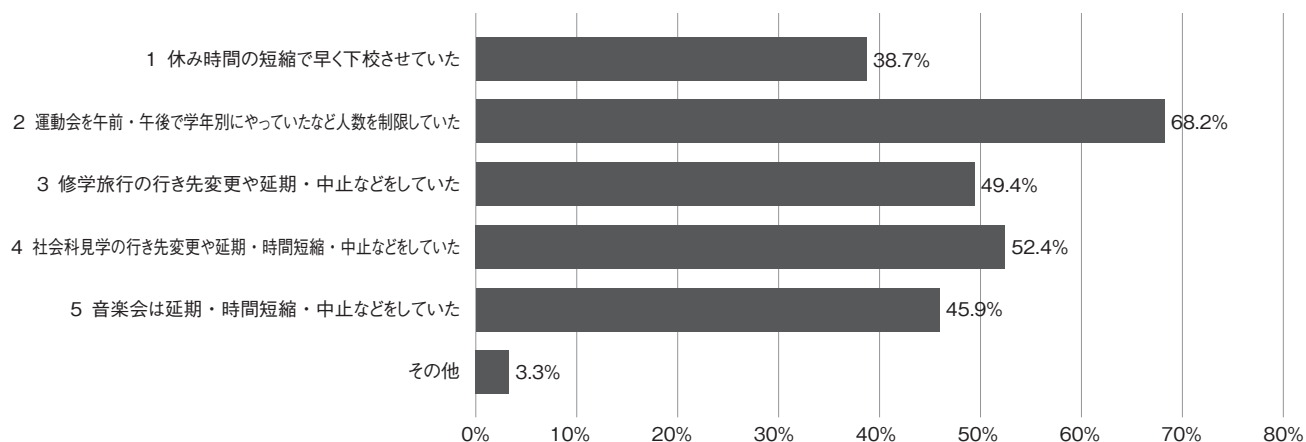
プリント（用紙）の配布代わりの使用については、印刷する手間が省ける、きちんと保護者に届くなど大変有効と思われるが、20% ほどの利用というのは意外である。また、低学年児童については、連絡帳の記入を単なる伝達メモではなく、「文字を書く」という学習活動が文字を理解したり、文章を書いたりする基礎の学習活動ともなるという考え方もあると思われる。

アンケート回答など、誰もが ICT 機器を所有し容易に処理できるアンケートのアプリが整備されたことが考えられる。同様に掲示板アプリやプレゼンテーションアプリなども WEB 上で利用が可能のため、これからさらに多様な利用方法が出てくるとと思われる。

また、「その他」の少数意見の記述の中で、安易に連絡ができるようになったことに伴い、明日の学習準備物の連絡などが前日夜に突然送られてくるなど、情報モラル等にも関わる課題も留意していく必要がある。

2. コロナ下での学校の取り組みについて

① 過去も含めてコロナ下でのお子様への学校の取り組みを教えてください。



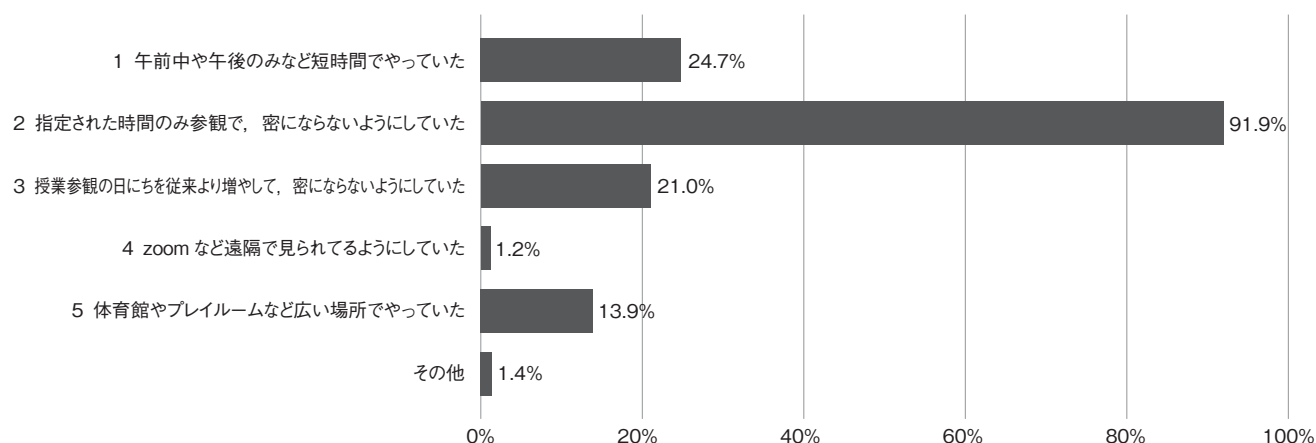
運動会については、学年を分け時間を調整するなど実施方法を工夫した学校が60%以上ある。また、修学旅行や社会科見学、音楽会などの学校行事についても半分ぐらいの学校で延期や時間短縮、また中止などコロナにより実施方法を変更したことがわかる。

さらには、30%以上の学校で下校時刻を早める措置をとっていた。

その他としては、「給食での黙食」という回答が多く、保護者にも気になっていることだったことがわかる。

これら学校行事は児童が楽しみにしていることの1つなので、縮小や変更、中止というのは家庭でも関心が高いと思われる。また、コロナの問題が収束した後、行事がどう行われるか今後調査をしたい。

② コロナ下で授業参観のあり方について教えてください。(複数回答可)



授業参観については、参観の時間を指定して分散する方法をとっているという回答が90%以上と圧倒的に多かった。また、同じ分散でも、開催期間を伸ばして密にならないようにしたり、広い部屋にしたりと工夫しているという回答も10～20%あった。

しかし、GIGAスクール構想により校内全教室にネットワークが整備されたが、Zoomなど遠隔で授業公開したというところは1%しかなかった。

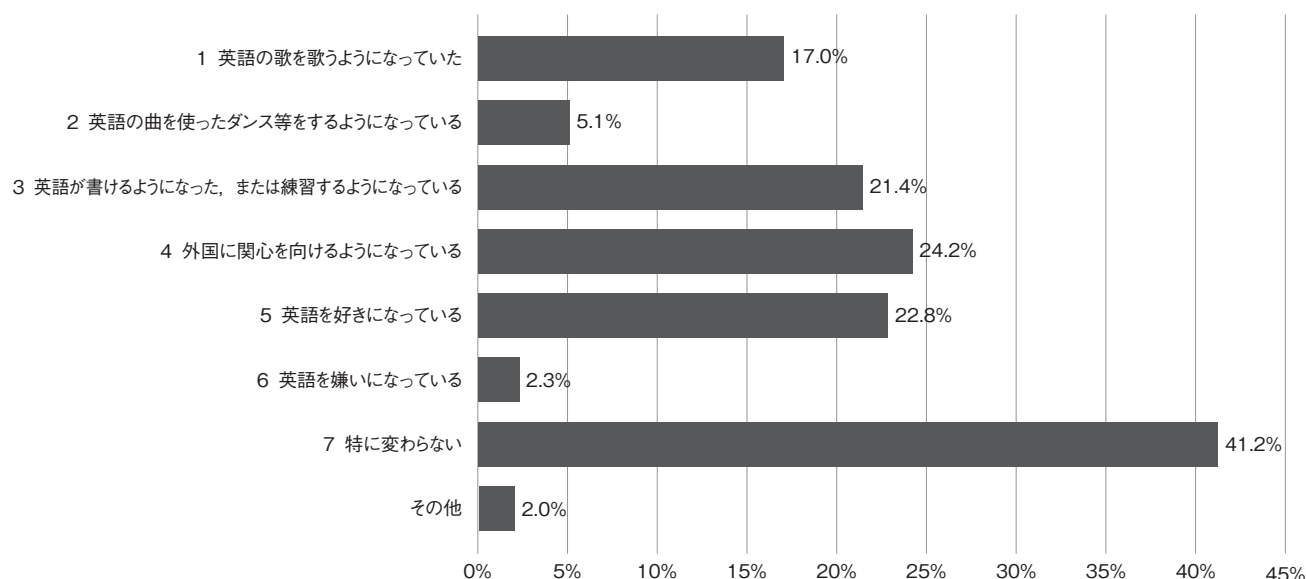
その他の回答では、分散方法について地域毎にしたり、時間で入れ替え制にしたりと学校毎に様々な工夫をしていたという回答が見られた。

授業参観という保護者等に学校教育への理解を深める行事に学校がいろいろな工夫をしていたことが分かるが、コロナ等には一番有効と思える遠隔授業公開についてこのように少なかったのは、当時は整備中でありネットワークの容量の少なさが考えられる。セキュリティの理解など、今後強化され整備されていくと推察される。

現在、学校では欠席した児童向けに、ビデオ会議システムを利用して授業に参加できるようにしているところが1—①の調査で10%あることが分かっている。今後、このような利用を広げることで、各学級それぞれの授業公開が可能になるであろう。コロナ禍の意識は薄くなりつつあるが、これからもインフルエンザの流行などを考慮すれば、Zoom等のビデオ会議システムは有効と考える。そのためには、さらに高速ネットワークの整備や、気軽に学校公開を行っていくことが必要と思われる。

3. 外国語（英語）の教科化について

① 学校の外国語（英語）指導が導入されてお子様に当てはまることを教えてください。 （複数回答可）



外国語（英語）の教科化について、「英語が書けるようになった、または練習するようになった」の回答は、1・2年生11%、3・4年生21%、5・6年生31%となっていて学年が上がるとともに割合も上昇傾向がみられる。

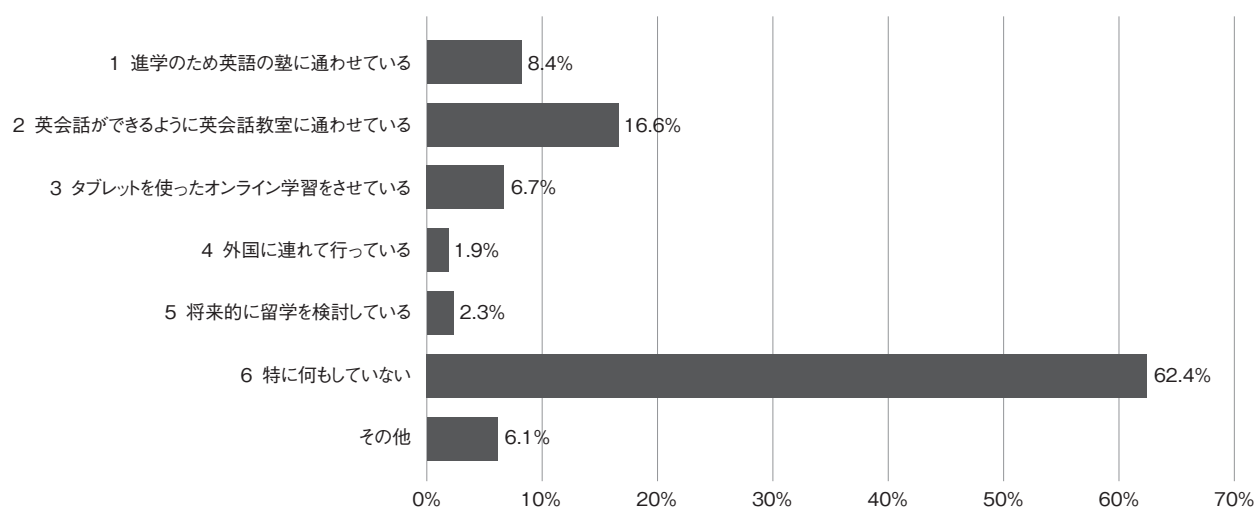
「外国に関心を向けるようになっていた」の回答は、1・2年生20%、3・4年生25%、5・6年生27%となっている。「英語を好きになっている」の回答は、1・2年生22%、3・4年生23%、5・6年生24%となっている。それぞれ、「英語が書けるようになった、または練習するようになった」の回答と同様の傾向がみられる。

また、「英語を嫌いになっている」の回答は、全体を通して2%と低く、予想よりも少なかった。さらに、小学校3年生から外国語活動が取り入れられ、小学校5年生から英語が教科化となっても、既に小学校1年生から英語による外国語活動が行われてきた学校が多いことから、ご家庭の皆様の驚きや心配も多くなかったと考える。

ただ、「特に変わらない」の回答が1・2年生41%、3・4年生39%、5・6年生43%、全体を通して41%となり大きな割合を示している。

令和5年度からお子様に電子教科書が配付されることから、ご家庭での活用の場面も多くなると推測される。

② 英語の学習のためお子様に何かしていることを教えてください。(複数回答可)



「進学のため英語の塾に通わせている」の回答は、1・2年生6%、3・4年生6%、5・6年生12%、全体を通して8%となっている。

「英会話ができるように英会話教室に通わせている」の回答は、1・2年生18%、3・4年生15%、5・6年生17%、全体を通して17%となっている。

また、「タブレットを使ったオンライン学習をさせている」の回答は、1・2年生8%、3・4年生7%、5・6年生6%、全体を通して7%となっている。

反面、「特に何もしていない」の回答は、1・2年生61%、3・4年生63%、5・6年生62%、全体を通して62%と大きな割合を示している。これは、①の回答「7特に変わらない」と同じ傾向と考えられる。

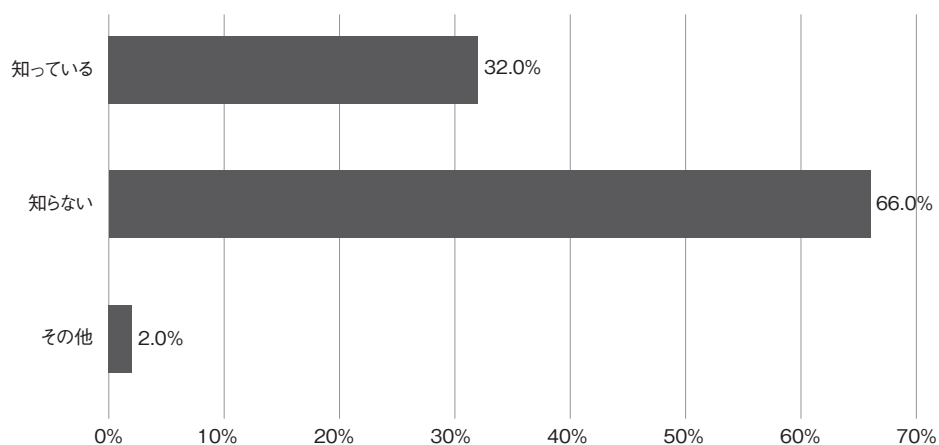
英語教育のスタートが中学校1年生から小学校5年生に変わったことにより、それに対応するためお子様を英語の塾や英会話教室に通わせるご家庭が増えている。

タブレット学習をご家庭で積極的に取り入れている様子も伺える。主体的な英語学習に取り組む姿勢ができてくると期待できる。

また、一方で特に何もしていないが60%を超えており、ここの理由について今後調査していくことが必要と思われる。学校への信頼なのか、まだもう少し先でよいとの判断なのか、今後分析を図りたい。

4. SDGsへの対応について

① 学校の取り組みはご存知ですか



SDGsに対する学校の取り組みを「知っている」の回答は、1・2年生25%、3・4年生30%、5・6年生38%、全体を通して32%となっていて学年が上がるとともに上昇傾向がみられる。

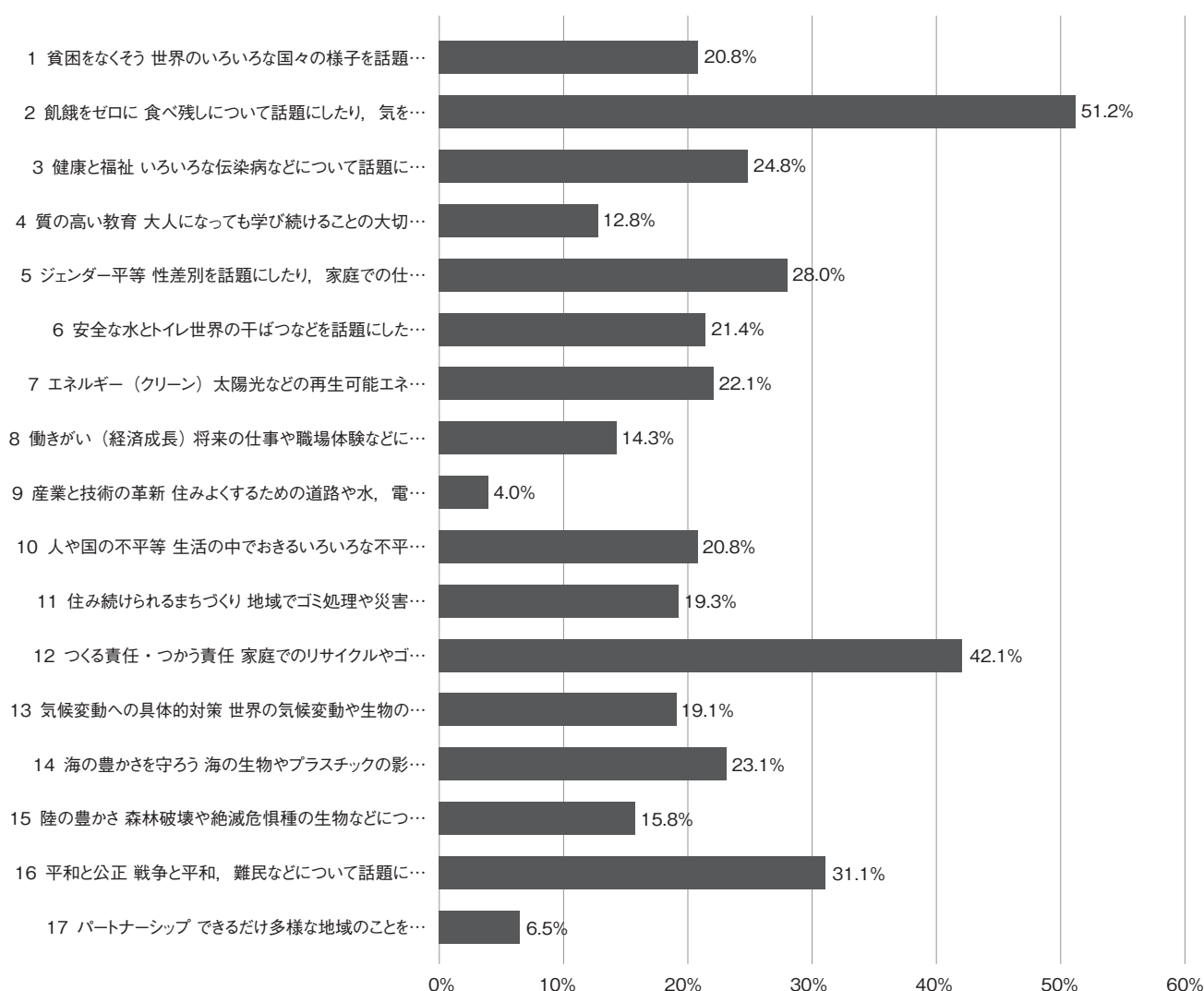
それであってもSDGsに対する学校の取り組みを「知らない」の回答は、1・2年生73%、3・4年生66%、5・6年生60%、全体を通して66%と大きな割合を示している。

SDGsについては、環境、差別、貧困、人権問題といった課題を世界中みんなで2030年までに解決していこうとする計画・目標であることを多くのご家庭の皆様が理解していると思われる。

しかし、学校で対応している多くの取り組みは、食育などSDGsの一部であるにも関わらずそれをSDGsと意識されていないのか、あるいはご家庭に十分知らされていないのかと思われ、「知らない」の回答の割合が多かった。

学校としても、人権教育などと同じように多くの場面でSDGsに対応している。保護者に伝わっていない要因について今後も調査の必要がある。

② SDGsについて、ご家庭でお子様とお話をしたり気をつけたりしていることがありますか？ (複数回答可)



SDGsについて、「飢餓をゼロに 食べ残しについて話題にしたり、気をつけたりしている」の回答は、1・2年生48%，3・4年生54%，5・6年生52%，全体を通して51%と各学年とも大きな割合を示している。

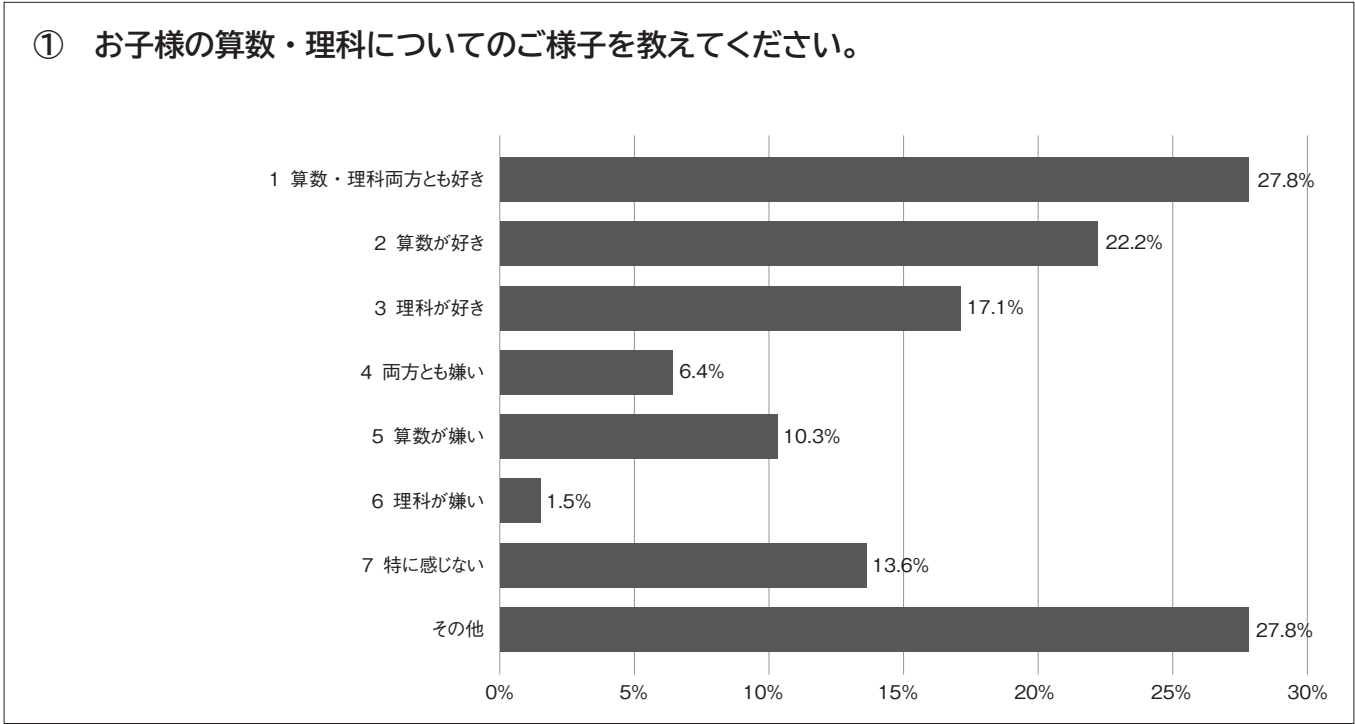
「つくる責任・つかう責任 家庭でのリサイクルやゴミの廃棄に気をつけている」の回答は、1・2年生23%，3・4年生24%，5・6年生51%，全体を通して42%となり、高学年が特に意識されている。

また、「平和と公正 戦争と平和、難民などについて話題にしている」の回答は、1・2年生10%，3・4年生9%，5・6年生35%，全体を通して31%となり、高学年が特に意識されている。

全体的にご家庭でもSDGsについて関心が高く、思った以上にお子様と話題されているように思われる。しかし、「産業と技術の革新 住みよくするための道路や水、電力などの整備について話題にすることがある。」「地域のまちづくり等の集会に参加している」の回答は、1・2年生1%，3・4年生1%，5・6年生5%，全体を通して4%となっている。「パートナーシップ できるだけ多様な地域のことを話題にして、広い視野で社会を見られるようにしている」の回答は、1・2年生1%，3・4年生1%，5・6年生8%，全体を通して7%とこちらも低い割合である。これらは、ご家庭での生活に密着する部分が薄く、学校でも触れているもののお子様への意識付けが十分でないと考えられる。

加えて、「エネルギー（クリーン）太陽光などの再生可能エネルギーを話題にしたり、使用したりしている」の回答は、1・2年生10%，3・4年生17%，5・6年生26%，全体を通して17%となっている。「気候変動への具体的対策 世界の気候変動や生物の影響などを話題にしている」の回答は、1・2年生19%，3・4年生7%，5・6年生23%，全体を通して19%と思ったほど高くない。

5. 理数教育について



「算数・理科両方とも好き」の回答は、約28%、「算数が好き」が22%、「理科が好き」が17%で、合計67%となり、約70%の児童が理科・算数に対して高い関心をもっていることが分かる。

一方で、「算数が嫌い」の回答は、約10%、「理科が嫌い」の回答は、約2%、「算数・理科両方が嫌い」の回答は約6%で、合計18%となり、約20%の児童が理科・算数に関心をもっていない。

また、「特に感じない」の回答は、約14%、「その他」の回答は約28%である。その他の回答は文科省の令和4年度学習状況調査での関心の高さと比較して（理科79.9%・算数62.5%）も保護者の見取りも相違なく関心の高さはうかがえる。

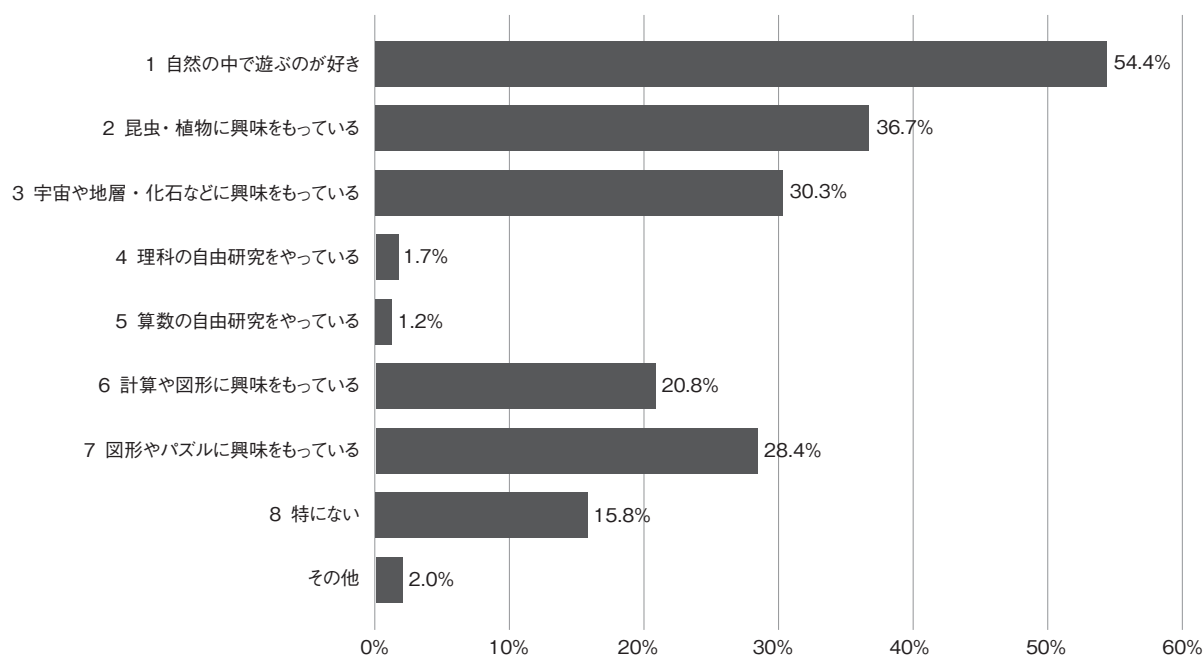
「算数が好き」の回答は、低学年で約41%、中・高学年で約14%となり、中学年から算数への関心が低くなっている。また、「算数が嫌い」の回答は、低学年で約13%、中学年で約9%、高学年で約10%で、中学年から「算数が好き」の割合が低くなっているにもかかわらず、「算数が嫌い」の割合は増えているわけではない。しかし、小学校に入学し算数と出会う低学年で「算数が嫌い」と回答している割合が約13%あることから、低学年で算数を嫌いにさせない工夫や、中学年から算数への関心を高める工夫が必要であろう。

「理科が好き」の回答は、低学年で約4%、中学年で約27%、高学年で約20%となっており、一方で「理科が嫌い」の回答は、低学年で約0%、中学年で約7%、高学年で約3%で、理科への関心は概ね高いと言える。

しかしながら、「特に感じない」の回答は、低学年で約22%、中学年で約9%、高学年で約12%となり、算数や理科に強い関心を示していない児童も一定数いるようである。

これらのことから、算数や理科への関心を高め、また関心を維持している工夫が必要であろう。

② お子様が興味を示しているものを教えてください。
(複数回答可)



「自然の中で遊ぶのが好き」の回答が、約54%の回答が、約30%で大変多くの児童が身近な自然の事物や現象に高い関心をもっていることが分かる。

また、「計算や図形に興味をもっている」の回答が、約21%、「図形やパズルに興味をもっている」の回答が約28%と、理科的なものへの関心よりは低いものの数量や図形への関心も高いと言える。

しかしながら、「理科の自由研究をやっている」の回答が約2%、「算数の自由研究をやっている」の回答が約1%と、非常に低い割合となっており、算数や理科の自由研究に取り組むための方法や取り組み方などについて、児童や保護者への支援や広報活動が必要であろう。

「自然の中で遊ぶのが好き」の回答は、低学年で約66%、中学年で約57%、高学年で約42%と、学年が上がるにしたがって少しずつ低くなっているが、高水準である。

また、「昆虫や植物に興味をもっている」の回答は、低学年で約48%、中学年で約38%、高学年で約27%と、「自然の中で遊ぶのが好き」の回答と同様に、学年が上がるにしたがって少しずつ低くなっている。

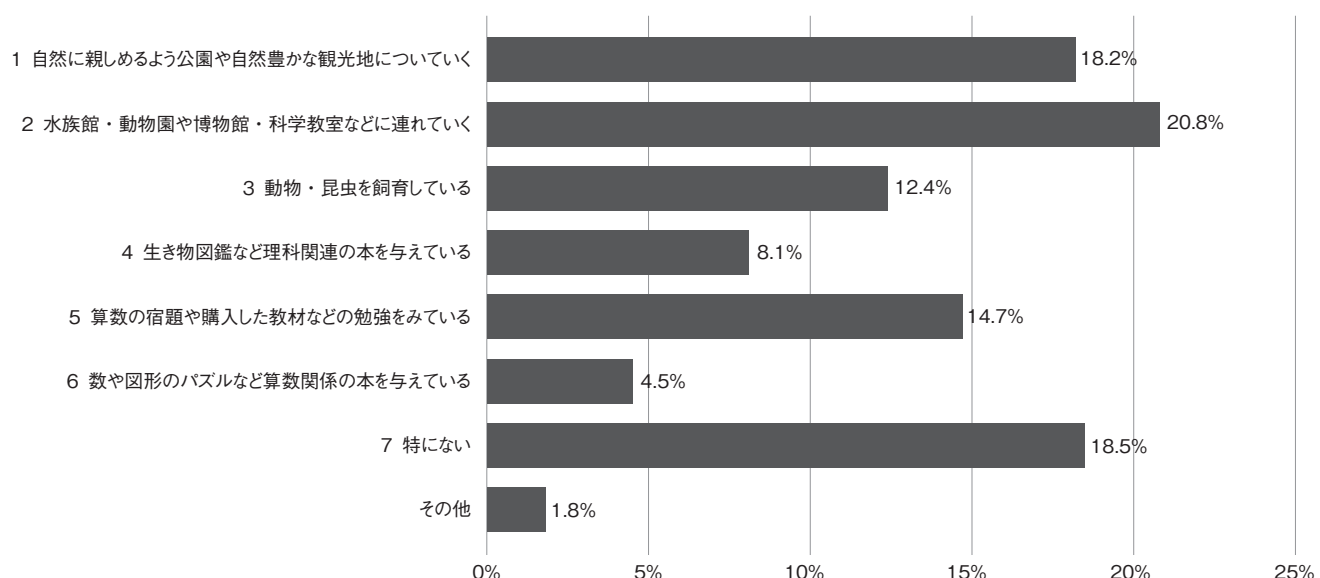
「宇宙や地層・化石などに興味をもっている」の回答については、低学年で約31%、中学年で約34%、高学年で約28%と、低・中・高学年間であまり差異は見られない。

「計算や図形に興味をもっている」の回答は、低学年で約23%、中学年で約21%、高学年で約19%と、学年が上がるにしたがって少しずつ低くなっているが、低・中・高学年間であまり差異は見られない。

また、「図形やパズルに興味をもっている」の回答についても、低学年で約31%、中学年で約29%、高学年で約26%と、低・中・高学年間であまり差異は見られない。

一方で、「理科の自由研究をやっている」「算数の自由研究をやっている」の回答は、低・中・高学年の学年でも約1～2%と低く、前述したように理科や算数の自由研究に取り組むための広報活動が必要である。

③ 算数・理科が好きになるよう、ご家庭で取り組まれていることを教えてください。



「自然に親しめるよう公園や自然豊かな観光地につれていく」の回答が、約18%、「水族館・動物園や博物館・科学教室などに連れていく」の回答が、約21%と自然や理科への関心が高まる施設等へお子様を連れて行っている家庭の割合が高い。

また、「動物や昆虫を飼育している」の回答が、約12%、「算数の宿題や購入した教材などの勉強をみている」の回答が約15%、「生き物図鑑など理科関連の本を与えている」の回答が、約8%、「数や図形のパズルなど算数関係の本を与えている」の回答が約5%と、家庭では、お子様が算数や理科が好きになるような様々な取組を行っている。

一方で、「特にない」の回答が、約19%あり、家庭における「算数や理科が好きになるような取組」の差が大きい。

「自然に親しめるよう公園や自然豊かな観光地につれていく」、「水族館・動物園や博物館・科学教室などに連れていく」の回答は、低・中・高学年で約17%～約24%で学年間における大きな差異は見られず、高水準である。

また、「動物・昆虫を飼育している」の回答は、低・中・高学年で約13%、約11%、約13%と学年間における大きな差異は見られない。「生き物図鑑など理科関連の本を与えている」の回答も、低・中・高学年で約8%、約10%、約7%で学年間における大きな差異は見られない。

「算数の宿題や購入した教材などの勉強をみている」の回答は、低・中・高学年で約16%、約14%、約14%で学年間における大きな差異は見られない。

興味深いのは、前述したように「算数や理科が好きになるよう取組」の問いに対して、「特にない」の回答が、低・中・高学年で約11%、約18%、約25%と学年が上がるにつれて高くなっている。高学年は自立していくので親の手を離れるのか、指導が難しくなって教えられなくなっているのか、今後もこのあたりを調査して深堀していきたい。